

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

中国小説史略号讚第十四

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 1999-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1639

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中國小説史略考證 第十四

中 島 長 文

第十四篇 元明傳來之講史（上）

1 宋之説話人、以至餘四種恐亦此類。

三六一

鉛印本大略十三及びそれ以後の史略第七版までは、第十四篇の記述内容は『水滸傳』を主とし、『三國志演義』については第十五篇で扱われていた。『三國志演義』は『水滸』よりも後に出たとする章學誠の『丙辰劄記』の意見があるが、それとの關係は分からない。しかし訂正版で編成を變えて第十四篇で『三國志演義』とその系統の「講史」について述べ、『水滸傳』を第十五篇で講じることになった。その理由は訂正版の題記に「如鹽谷節山教授之發見元刊全相平話殘本及『三言』、并加考察、在小説史上、實爲大事」と記す如く、日本での元刊全相平話殘本、なかでも『三國志平話』の發見によって、「説三分」に繋がるより古い資料が出たためであろう。しかし最初の寫印本大略第十一篇「元明傳來之歴史演義」では、題材の歴史的時間の先後からか、『三國志』『水滸傳』の順で分篇せずに講じられ

ており、編成の順序だけから言えば訂正版で元に戻ったことになる。

なおこの部分、冒頭の「宋之説話人、于小説及講史皆多高手、……而不聞有著作」が鉛印本大略（第十三篇）以來、ずっと「史略」（第十四篇）の冒頭の記述である他には、すべて訂正版で補筆されたものである。

鹽谷溫「明の小説」「三言」に就て（二）「斯文」第八編第六號（大正十五年九月）云、それにしましては、あちらに列べて置きました内閣文庫所藏の「全相平話」といふ書は、元朝の小説の眞面目を知るには實に唯一無二の文獻であります。

内閣文庫の舊藏中の宋元版の書は殆ど宮内省圖書寮の方へ移管されたと聞いて居りますのに、之は又どういふ機會で取り残されたものでありませう。一小説に過ぎざる爲でもありませんが、寧ろ知らんそれが今日小説史の研究の上には極めて大切な史料であります。（本年二月發行の本誌第八編第一號の口繪にその一葉を見本に掲げました。）乍遺憾之は破本で全體何種あつたものか分りませぬが、「參考書目」にあります通り、

武王代レ紂書

三卷

樂毅圖レ齊七國春秋後集

三卷

秦併二六國一

三卷

呂后斬二韓信一前漢書續集

三卷

三國志

三卷

五本、十五卷より外ありませんが、それでも片鱗以て龍の全體を窺ふに足ります。その中の三國志の見返しの上欄に小字にて「建安虞氏新刊」と横書し、その下に繪圖あり、下半に大字にて「新全相三國志平話」と縦二行に分書し、その中間に「至治新刊」と小字にて縦書してあります。至治とは元の英宗の年號で、三年（皇紀一九八一—一九八三）

つきました。建安は縣名で今福建に屬して居ります。虞氏は發行書肆の姓であります。全體が何代に始まり、何代に終つて居るかも分りませぬが、その七國春秋後集といへば前集のあつたことは疑なく、又前漢書續集といへば正編も必ずあつたのでありませうし、又前漢書と三國志との間には後漢書もあつたことでありませう。他書はさて置きこの「三國志」につき一言致し度存じます。三國は英雄輩出し、局面は旋轉極りなく、二袁・董卓・呂布等忽ち起り忽ち滅び、曹操の霸業成らんとして周郎の赤壁に一蹶し、孫權は父兄の資に據りて江東に國を建て、孔明は劉玄德三顧の恩に感激して、草廬を出で、遂に三分の策を定め、中原を恢復して漢室を再興せんとしたのに、時利あらず、大星空しく五丈原に落ちて、出師の二表鬼神を泣かしむる等、走馬燈にも似たる局面は實に古今天下を争ふ一大奇局であります。前後九十七年間、楚漢の様にあつけなくもなく、又春秋戰國の様に複雑でもなく、ちやうど適當であります。されば三國の説話は早くより俗間に傳へられ、李義山の「驕兒詩」の中に「或謔張飛胡。或笑鄧艾吃」の二句がある所を見ますれば、唐の時にも關羽・張飛の話が流行して、それを小供が扮したものでありませう。前に引きました「東坡志林」や、「都城紀勝」の文に依つても、宋代に盛であつたことが知られます。その稿本たる、宋の話本が傳らなものは頗る遺憾であります。この「全相平話」中の「三國志」は實に元代三國評話の好標本であります。文體はさまで俗語でもなく、中には史記の文句をそのまま、寫した様な所もありまして、如何にも元朝の文學の低級なことを證するに足りません。之がとりもなほさず、羅貫中の編纂したといはれる「三國演義」の源流であります。」

「建安、虞氏刊本」の「建安」とあるべき所を、「史略」は訂正版の最初から「新安」と誤り、以後現行の全集に至るまで訂正を加えられていない。これは現物に質しても、鹽谷博士の論文に就いても「建安」でなければならぬ。鄭振鐸が「三國志演義的進化」でやはり「新安」と誤っているから、それに引かれたものか。「全相平話五種」は「三

「國志平話」を鹽谷博士が影印、これを商務印書館が翻印したもの（一九二八）があり、後倉石武四郎博士が残る四種を影印刊行したものである。一九五六年には文學古籍刊行社がそれらを影印合訂した。排印本には古典文學出版社（一九五五）、上海古籍出版社（一九九〇・『宋元平話集』所収）のものがある。『魯迅藏書目錄』は鹽谷博士影印の「至治新刊全相平話三國志 三卷」（七十一頁）と商務印書館版を著録する。

『五代史平話』については本稿第十二篇9参照。

2 說「三國志」者、以至乃因有羅貫中本而名益顯。

三六一六

寫印本大略十二云、三國時多英雄、勇力智計、奇偉動人、而較之春秋戰國、易尋端緒、故尤宜於講說。唐時、已有說三國事者、見前篇。至宋、則說三分爲徽宗時都下伎藝之一科、（孟元老東京夢華錄）風行民間。亦用以悅小兒、東坡所謂「王彭嘗云、塗巷中小兒薄劣、其家所厭苦、輒與錢、會聚坐聽說古話。至說三國事、聞劉玄德敗、頻蹙眉有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快、以是知君子小人之澤、而世不斬」（志林卷六）者。是金元曲目中、亦有赤壁鏖兵、諸葛亮秋風五丈原、隔江鬪智、連環計等、而今日所扮演者尤多、其爲世所樂道可知也。

現行本の「說三國志者、在宋已甚盛、蓋當時」は訂正版での補筆。鉛印本大略より第七版に至るまで、引用「東坡志林」の前に、「宋時、里巷間有說古話者、其中即含三國故事」、後に「者是也」があり、「謂」を「所謂」に作る。又、「在瓦舍」の後に「則」字有り、更に「則爲世之所樂道」を「則其世所樂道」に作る。文末の「其在小説……」は訂正版での補筆。例によつて鉛印本大略から第七版までは基本的に變らない。

「小説的歴史的變遷」第四講云、一、「三國演義」講三國底事情の、也并不自羅貫中起始、宋時里巷中說古話者、有

說三分、就講的是三國故事。蘇東坡也說、王彭嘗云、「塗巷中小兒……坐聽說古話、至說三國事、聞劉玄德敗、

頻蹙眉、有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快。以是知君子小人之澤、百世不斬。」可見在羅貫中以前、就有『三國演義』這一類的書了。因爲三國底事情、不象五代那樣紛亂、又不象楚漢那樣簡單、恰是不簡不繁、適于作小說。而且三國時底英雄、智術武勇、非常動人、所以都喜歡取來做小說底材料。再有裴松之注『三國志』、甚爲詳細、也足以引起人之注意三國的事情。至羅貫中之『三國演義』是否出于創作、還是繼承、現在固不敢草草斷定、但明嘉靖時本題有「晉平陽侯陳壽史傳、明羅本編次」之說、則可見是直接以陳壽的『三國志』爲藍本的。但是現在的『三國演義』部已多經後人改易、不是本來面目了。若論其書之優劣、則論者以爲其缺點有三。(一)容易招人誤會。因爲中間所敘的事情、有七分是實的、三分是虛的。惟其實多虛少、所以人們或不免并信虛者爲真。如王漁洋是有名的詩人、也是學者、而他有——一個詩的題目叫「落鳳坡吊龐士元」、這「落鳳坡」只有『三國演義』上有、別無根據、王漁洋却被它鬧昏了。(二)描寫過實。寫好的人、簡直一點壞處都沒有、而寫不好的人、又是一點好處都沒有。其實這在事實上是不對的、因爲一個人不能事事全好、也不能事事全壞。譬如曹操他在政治上也有他的好處、而劉備關羽等、也不能說毫無可議、但是作者并不管它、只是任主觀方面寫去、往往成爲出乎情理之外的人。(三)文章和主意不能符合——這就是說作者所表現的和作者所想像的、不能一致。如他要寫曹操的好、而結果倒好像是豪爽多智、要寫孔明之智、而結果倒象狡猾。——然而究竟它有很好地方、象寫關雲長斬華雄一節、真是有聲有色、寫華容道上放曹操一節、則義勇之氣可掬、如見其人。後來做歷史小說的很多、如「開關演義」、「東西漢演義」、「東西晉演義」、「前後唐演義」、「南北宋演義」、「清史演義」……都沒有——一種跟得住『三國演義』。所以人都喜歡看它、將來也仍舊能保持其相當價值的。

鹽谷溫『支那文學概論講話』第六、小說云、三國志演義は御承知の通り三國の軍談で、傳へて羅貫中の作と申します。

三國・宋江二書、乃杭人羅本貫中所レ編云々、七修類稿

陳壽の三國志に據つて之を小説的に演述したものに過ぎませぬ。漢土人物の輩出したことは、前に春秋戰國を推し、後に三國を擧げます。蓋し漢末の爭亂より三分鼎立に至るまで、董卓・呂布・二袁の忽ち起り忽ち滅ぶる、曹操の群雄を戡定して中原を奄有する、孫權の父兄の資に據つて江東に割據する、劉玄德の流寓漂泊備前に辛苦を嘗め、後孔明を得て始めて運命を開拓せる、隆中の三顧、赤壁の一戰、變轉極りなき走馬燈の如き局面は、實に古今天下を爭ふの一大奇局で、之を演義した三國志は亦説話中の最も面白きものであります。李義山の驕兒の詩中に或譔張飛胡或笑鄧艾吃なる句もあり、東坡志林には左の一條があります。

王彭嘗云、塗巷中小兒薄劣、其家所厭苦、輒與錢、令三聚坐聽説古話、至説三國事、聞劉玄德敗、頻蹙眉、有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快、以是知君子小人之澤、百世不斬、卷六

されば唐宋の頃、既に三國志の軍談や、演劇が流行したのであります。金元の曲目中には赤壁鏖兵・諸葛亮秋風五丈原等の名が見え、元曲選には隔江鬪智・連環計の二種を収めてあります。そのみならず、今日に在つても空城計・打鼓罵曹・轅門射戟等の三國史劇は舊劇中の白眉で、一日の演劇數番の中、綸巾羽扇の諸葛先生や、戰袍橫槊の美髯公の英姿を見ざるはなく、三國史劇の流行は實に盛で、恰も我が忠臣藏の如きものであります。

『東坡志林』『魯迅藏書目錄』は『東坡志林』五卷 宋蘇軾著 民國九年(一九二〇)上海商務印書館據萬曆間趙開美刻本鉛印 一冊」と著録するが、『史略』に『志林』六とあることからすれば、この記述は『稗海』系の十二卷本に據つたことが分る。もつとも『史略』は鹽谷文からの引用である可能性も十分考えられる。『目錄』には明刊本『稗海』存七種とあるが、その中には見えない。

『金元雜劇』鹽谷博士の文を流用しているが、そのみではない。『赤壁鏖兵』は陶宗儀『南村輟耕錄』に見え、

『諸葛亮秋風五丈原』は元の王仲文の撰で、『録鬼簿』『太和聲音譜』に見える。『兩軍師隔江鬪智』は『太和聲音譜』『也是園書目』に見え、『元曲選』に収録、『錦雲堂暗定連環計』は元の無名氏撰でこれも『元曲選』に入る。『司馬昭復奪受禪臺』は二本あつて元の李壽卿撰と同じく李進取撰のが『録鬼簿』に見える。これは魯迅が補つたものである。この他『三國志』に關する演目は王國維『曲錄』に多數見える。

『東京夢華錄』五には「五代史」とあるのみで、上に「講」字は附かない。魯迅の思ひちがいであろう。

3 貫中、以至眞面殆無從復見矣。

二五十五

寫印本大略十二云、郎瑛說、「羅貫字本中、杭州人、編撰小説數十種。」今行世之三國水滸隋唐諸演義、尚云羅氏作、蓋當時小説名手、而是否亦長講演、則不可考。貫、或云名本字貫中（王圻續文獻通考）、或云越人、生洪武初（周亮工書影）爲施耐菴門人（胡應麟莊獄委談）、大約生於元、至明尚存者也。

この部分、鉛印本大略では第十三篇、史略初版至第七版では第十四篇に記述。訂正版までは通じて「貫中、名本」は「又有羅本字貫中」に、「胡應麟四十一」は「及筆叢」に、「書影」は「書影一」に、「蓋元明間人」は、「疑實生於元、至明初猶在」に、「所著」は「其所著」、「甚」は「尤」に、「諸小説」は「水滸三國志等書」に、「眞面殆無……」は「施羅眞面、殆已無……」に各々作る。また「或云名貫」の上に「或云耐菴的門人（亦『筆叢』說）」の一句、「今存者」の下に「有」字があり、王圻『續文獻通考』の卷數なく、また同じく「字貫中」の句なく、「之外、尚有」、「殘唐五代史演義」、「水滸傳」等」なし。郎瑛二十三の「三」、「遊覽志餘」二十五の「五」を各々「二」、「四」に誤り、五七年版全集に至つて始めて訂正さる。

「小説的歴史的變遷」第四講云、總之、宋人之說話的影響是非常之大、後來的小説、十分之九是本于話本的。如

一、後之小說如『古今奇觀』等片段的敘述、即仿宋之“小說”。二、後之章回小說如『三國志演義』等長篇的敘述、皆本于“講史”。其中講史之影響更大、并且從明清到現在、『二十四史』都演完了。作家之中、又出了一箇著名人物、就是羅貫中。

羅貫中名本、錢唐人、大約生活在元末明初。他做的“小說”很多、可惜現在只剩了四種。而此四種又多經後人亂改、已非本來的面目了。——因為中國人向來以“小說”為無足輕重、不似經書、所以多喜歡隨便改動它——至于貫中生平之事跡、我們現在也無從而知。有的說他因為做了水滸、他的子孫三代都是啞巴、那可也是一種謠言。貫中的四種“小說”、就是、一、「三國演義」。二、「水滸傳」。三、「隋唐志傳」。四、「北宋三遂平妖傳」。『北宋三遂平妖傳』、是記貝州王則借妖術作亂的事情、平他的有三箇人、其名字皆有一“遂”字、所以稱“三遂平妖”。『隋唐志傳』、是叙自隋禪位、以至唐明皇的事情。——這兩種書的構造和文章都不甚好、在社會上也不盛行、最盛行、而且最有勢力的、是『三國演義』和『水滸傳』。

小說舊聞鈔『水滸傳』項引『七修類稿』三三云、三國、宋江二書、乃杭人羅本貫中所編。予意舊必有本、故曰編。宋江又曰錢塘施耐菴的本。昨於舊書肆中得抄本錄鬼簿、乃元大梁鐘繼先作、載元宋傳記之名、而於二書之事尤多。據此、(尤)見原亦有跡、因而增益編成之耳。(尤)字據上海中華書局本(一九五九)補。

小說舊聞鈔『水滸傳』項引『西湖遊覽志餘』二五云、錢塘羅貫中者、南宋時人、編撰小說數十種、而水滸傳叙宋江等事、姦盜脫騙機械甚詳、然變詐百端、壞人心術。其子孫三代皆啞、天道好還之報如此。(魯迅)案羅貫中子孫三代皆啞之說、始見於此。王圻續文獻通考之所謂「說者」、殆即指田叔禾。

小說舊聞鈔『水滸傳』項引『少室山房筆叢』四二云、今世傳街談巷語、有所謂演義者、蓋尤在傳奇雜劇下。然元人武

林施某所編水滸傳、特爲盛行。世率以其鑿空無據、要不盡爾也。余偶閱一小說序、稱施某嘗入市肆、袖閱故書、於敵楮中得宋張叔夜擒賊招語一通、備悉其一百八人所由起、因潤飾成此編。其門人羅本亦效之爲三國志演義、絕淺鄙可嗤也。

小說舊聞鈔「水滸傳」項引「續文獻通考」一七七經籍考傳記類云、「水滸傳」羅貫著。貫字貫中、杭州人。編撰小說數十種、而「水滸傳」叙宋江事、姦盜脫騙機械甚詳、然變詐百端、壞人心術、說者謂子孫三代皆啞、天道好還之報如此。

小說舊聞鈔「水滸傳」項引「書影」一云、「水滸傳」相傳爲洪武初越人羅貫中作。又傳爲元人施耐庵作、田叔禾「西湖遊覽志餘」又云此書出宋人筆。近金聖嘆自七十回之後、斷爲羅所續。因極口詆羅、復僞爲施序於前、此書遂爲施有矣。予謂世安有爲此等書人、當時敢露其姓名者、闕疑可也。定爲耐庵作、不知何據。（魯迅）案、嘗見明刻百回本「忠義水滸傳」、已題「施耐庵集撰、羅貫中纂修」、蓋在聖嘆前。「書影」五卷本、十卷本皆載之。

「小說舊聞鈔」再版序言云、此十年中、研究小說者日多、新知灼見、洞燭幽隱、如「三言」之統系、「金瓶梅」之原本、皆使歷來凝滯、一旦豁然。自「續錄鬼簿」出、則羅貫中之謎、爲昔所聚訟者、遂亦冰解。此豈前人憑心逞臆之所能至哉。（下略）

「續錄鬼簿」云、羅貫中 大原人、號湖海散人。與人寡合、樂府隱語、極爲清新。與余爲忘年之交、遭時多故、各天一方。至正甲辰復會、別來又六十余年、竟不知其所終。風雲會 趙太祖龍虎風雲會 蜚虎子 三平章死哭蜚虎子 連環諫 忠正孝子連環諫天一閣本、上海古籍出版社本（一九七八）

4 羅貫中本「三國志演義」、以至時時如見矣。

寫印本大略十二云、然宋元之三國話本、今已不傳、明刊一本相傳即出羅貫中手、體例爲話本、然亦無由測其有所傳受、

抑生於摸擬也。(中略)三國演義百二十回、起自漢三傑桃園結義、而終以孫皓之降。排比陳壽三國志與裴松之注、間採稗史而又雜以臆說。以舊史爲本據、則難于抒寫、偶雜以虛造、則易滋混淆、故謝肇淛病其「太實則近腐」(五雜俎)、章學誠誓其「七實三虛、惑亂觀者」(丙辰劄記)也。而況描寫賢奸、頗失分際、以致玄德似僞、孔明近詐、而奸雄孟德反多率真而近情、胡應麟以爲「絕淺鄙可嗤」、固非溢惡之論矣。

鉛印本大略十三より史略第七版に至るまで、「羅貫中本……後學羅本貫中編次。」を「然宋元之三國話本、今俱不傳、能見者要以羅氏本爲最古、惟亦莫辨其出于摸擬、抑又有所師承。全書一百二十回、回分上下、得二百四十卷、明嘉靖時本題曰「晉平陽侯陳壽史傳、明羅本貫中編次。」(百川書志六)に作る。「祭天地桃園三結義」、訂正版で始めて嘉靖本(魯迅の所謂弘治本)に據つて「三」を刪る。また第七版までは「間亦仍采平話、又加推演而作之」を「間采稗史、且又雜以臆說作之」に作り、「且更盛引『史官』及『後人』詩」を「引詩則多爲胡曾與周靜軒」に、「論斷頗引……」の「頗」を「仍」に、「雜虛辭復易滋混淆」の「復」を「則」に作る。

鹽谷澠『支那文學概論講話』第六、小説、承前節²所引而云、扱本書は全篇百二十回、宴三桃園一豪傑三結義に始まり、降二孫皓三分歸二統一に終つて居ります。内容は前申す通り、陳壽の三國志に據り、之を小説的に演述したもので、史實に根柢を有して居りますから、水滸傳や西遊記の如くに空に憑つて想を構へ、無中有を生じ、意に任せて筆を揮ふ譯にゆかず、大に窮屈であります。そこに作者の苦心があり、大手筆が窺はれます。明の謝肇淛の五雜俎に左の如く述べてあります。

惟三國演義、與三錢唐記・宣和遺事・楊六郎等書一、俚而無味、何者、事太實則近腐、可三以悅三里巷小兒一、而不_レ足_下爲_二士君子_一道上也、

胡應麟も亦大に三國志に不満足であります。實際水滸傳とは較べものになりませぬ。東坡志林にいふ通り、誰しも劉玄德に同情を有し曹操に惡感を抱くのでありますが、本書に於ては奸雄曹操の面目は躍如として、寧ろ天真爛漫愛すべきものとなり、謙虚賢を重んずる玄德は偽君子に近く、忠亮貞節の諸葛孔明は却て權謀に富める策士と成り了れる感をするのは、要するに鼻頂の引き倒しであります。

『五雜俎』一五云、小説野俚諸書、稗官所不載者、雖極幻妄無當、然亦有至理存焉。如水滸傳無論已、西游記曼衍虛誕、而其縱橫變化、以猿爲心之神、以猪爲意之馳、其始之放縱、上天下地、莫能禁制、而歸於緊箍一呪、能使心猿馴伏、至死靡他、蓋亦求放心之喻、非浪作也。華光小説、則皆五行生尅之理、火之熾也、亦上天下地莫之撲滅、而眞武以水制之、始歸於正道。其他諸傳記之寓言者、亦皆有可采。惟三國演義與錢塘記、宣和遺事、楊六郎等書、俚而無味矣。何者、事太實則近腐、可以悅里巷小兒、而不足爲士君子道也。中華書局本（一九五九）。

章學誠『丙辰劄記』云、演義之最不可訓者、桃園結義。甚至忘其君臣、而直稱兄弟。且其書似出水滸傳後。叙昭烈關張諸葛、俱以水滸傳中崔符嘯聚行徑擬之。諸葛丞相、生平以謹慎自命、卻因有祭風及製造木牛流馬等事、遂撰出無數神奇詭怪。而於昭烈未即位前、君臣寮案之間、直似水滸傳中吳用軍師、何其陋耶。張桓侯、史稱其愛君子、是非不知禮者、演義直以擬水滸之李逵、則侮慢極矣。關公顯聖、亦情理所不近。蓋編演義者、本無知識、不脫傳奇習氣、固亦無足深責、卻爲其意欲尊正統、故於昭烈忠武頗極推崇、而無如其識之陋爾。凡演義之書、如列國志東西漢說唐及南北宋、多紀實事、西游金瓶之類、全憑虛構、皆無傷也。惟三國演義、則七分實事、三分虛構、以致觀者往往爲所惑亂、如桃園等事、學士大夫、直作故事用矣。故演義之屬、雖無當於著述之倫、然流俗耳目漸染、實有益於勸懲、但須實則概從其實、虛則明著寓言、不可虛實錯雜、如三國之涪人耳。章氏遺書本

『史略』は現存する『三國志演義』の最も古い版本を「弘治本」と稱している。これは一九二九年に影印された上海商務印書館本が弘治甲寅（弘治七年一四九四）の蔣大器の序しか載せておらず、嘉靖壬午（嘉靖元年一五二二）の關中修髻子張尚徳の序を欠いていたため、「弘治本」と稱されるようになったが、實は「嘉靖本」と稱すべきものである。訂正版までは『史略』は『百川書志』によって現存最古の版本を「嘉靖本」としていたが、商務印書館本によって「弘治本」と改めた。ここは元に戻すべきである。一九七五年には人民文學出版社が二つの序を備えた完本を影印した。正式には『三國志通俗演義』と言う。なお魯迅は訂正版において商務印書館影印本によって引用文を改めている。

『魯迅藏書目錄』 子部小說家類云、繡像三國志演義 六十卷一百二十回 元羅貫中編者 清毛宗崗評 清光緒三十年（一九〇四）上海商務印書館鉛印本 八冊。

明弘治本三國志通俗演義 二十四卷 晉陳壽史傳 元羅貫中編次 民國十八年（一九二九）上海商務印書館及影印本 二十四冊

古本三國志通俗演義 元羅貫中編著 日本大正十五年（一九二六）日本田中慶太郎影印明萬曆間周曰校刊本 十二頁 右三本のうち所謂「弘治本」については、日記一九二九年六月二十三日に「下午三弟爲……豫約『全相三國志平話』一部三本、『通俗三國志演義』一部二十四本、共泉十元八角。」とある。

⁵ 如叙羽之出身丰采及勇力云、以至引文末尾。

三〇十一

寫印本大略は引用文なし。鉛印本大略より第七版に至るまで、「階下」の上に「忽」字有り、「請斬我頭」の「我」を「某」に作り、「聽得寨外……」の「寨」を「關」に作り、「第九回」を「第五回上」に作る。

魯迅は訂正版の時点で、當時商務印書館が影印刊行した所謂「弘治本」即ち嘉靖本によって『三國志演義』の引用文

に訂正を加えているので、現行の『史略』は一部に脱誤があるものの、嘉靖本による引用であることは明白である。しかしそれ以前の版での所據版本は何なのかは二三の手掛りはあるものの未詳。手掛りの一つは嘉靖本との校勘による異同。さらに回数標記から、全百二十回、各回上下に分かれる計二百四十節の書であること。そして『史略』本文の「凡首尾九十七年事實」という表現から見て明の鄭以禎刊本の系統のものであること。鄭以禎刊本の系統のもは各卷末尾に「共首尾〇〇年事實」という記述があるので、『史略』の表現はそれに倣ったと考えられるからである。以上の手掛りはあるが、結局それが如何なる刊本であるかは分らない。日記の一九二三年七月七日に親友の馬幼漁から殘本『三國志演義』十六冊を借り、同月二十日に返還していることが見える。『藏書目錄』には毛宗崗本しか見えないから、『史略』の初期の版が據つたのは、あるいはこの馬氏所藏の殘本かもしれない。

6 又如曹操赤壁之敗、以至引文末尾。

三〇一九

寫印本大略は引用文なし。鉛印本大略より第七版まで「與元刊本平話、相去遠矣」の句なく、「一停填了坑塹」の「坑塹」を「溝壑」に作り、「一停跟隨曹操過險峻」を「一停跟隨曹操。過了險峻」に作る。三八年版全集は「停」を「定」に誤る。さらに「諸葛亮周瑜」を第七版までは「周瑜諸葛亮」に作り、「吾自是欺敵之過」を「是吾欺敵之過」に作り、「五百校刀手擺列」の「列」を「開」に作り、「某知……」を「某素知……」に作り、「必須救之」の「救」を「急」に作り、「某曾解白馬之危以報之」の「某」なく、句末に「矣」字有り、「古之人」の「人」なく、「雲長聞之」の「之」を「知」に作り、「低首良久不語」の「良久」なく、「說猶未了」を「來說」に作り、「如何不動心」の「心」上に「其」字有り、「放曹操的意」の「意」を「意思」に作り、「雲長勒回馬」の「勒」字なく、「張遼縱馬」の「縱」を「驟」に作り、「亦動故舊之心」の「心」を「情」に作り、「史官有諸曰」の「諸」を「諸讚」に作り、「微膽

長、存義」の「長」を「常」に作り、「二百回」を「五十回下」に作る。

7 弘治以後、以至五者改換詩文而已。

三三十二

寫印本大略はこの部分なし。「弘治以後……『三國志演義的演化』。迨」は、鄭振鐸の論文を承けての訂正版での補筆。以後は基本的に鉛印本大略の記述に沿うもので、「清康熙時」を鉛印本大略が「清初」とするのを除き、訂正版まで變更はない。訂正版以前は、「一切舊本」の「一切」なく、後は回数を、「百五十九回」は「八十回上」、「百六十七回」は「八十四回上」、「二百五回」は「百三回上」、「二百三十四回」は「百十七回下」とするのが異なるのみ。

鄭振鐸『三國志演義的演化』（『小説月報』第二十卷第十號・一九二六年六月）、後『中國文學論集』（一九三四・上海開明書店）、さらに『鄭振鐸文集』第五卷（一九八八・人民文學出版社）に収録。その第九章では明刊本として十種を挙げる。現在の調査では三十種近い明刊本の存在が指摘されている（魏安『三國演義版本考』一九九六・上海古籍出版社）。

史略の言う小規模な改變五者は、三の論讚の削除を除いて、すべて毛宗崗「凡例」の各項に照應するものがある。論讚の削除は「凡例」の言わぬ所だが、實際には殆んど削られている。例えば嘉靖本では何進が殺された直後の史官の詩の後に最初の論讚が来るが、毛本では史官の詩は残されるものの、論讚は削除されている。

なお冒頭の「弘治以後」は、前々節ですでに言及したが、現在のところまだ確實に弘治年間の刊本であるというものは発見されていないので、「嘉靖以後」と改めるべきである。

毛宗崗「三國志演義凡例」云、一、俗本之乎者也等字、大半齟齬不通、又詞語冗長、每多復沓處、今悉依古本改正、頗覺直捷痛快。

一、俗本紀事多訛，如昭烈聞雷失箸及馬騰入京遇害、關公封漢壽亭侯之類，皆與古本不合。又曹公罵曹丕，詳于范曄『後漢書』中，而俗本反誤書其黨惡。孫夫人投江而死，詳于『梟姬傳』中，而俗本但紀其歸吳，今悉依古本辨定。

一、事不可闕者，如關公秉燭達旦、管寧割席分坐、曹操分香賣履、于禁陵廟見畫，以至武侯夫人之才、康成侍兒之慧、鄧艾鳳號之對、鍾會不汗之答、杜預左傳之癖，俗本皆刪而不錄。今悉依古本存之，使讀者得窺全豹。

一、『三國』文字之佳，其錄於『文選』中者，如孔融『薦禰衡表』、陳琳『討曹操檄』，實可與前後『出師表』并傳，俗本皆闕而不載。今悉依古本增入，以備好古者之覽觀焉。

一、俗本題綱，參差不對，雜亂無章，又於一回之中，分上下兩載。今悉體作者之意而聯貫之，每回必以二語對偶爲題，務取精工，以快悅者之目。

一、俗本謬托李卓吾先生批閱，而究竟不知出自何人之手。其評中多有唐突昭烈謾罵武侯之語。今俱削去，而以新評校正之。

一、俗本之尤可笑者，與事之是者，則圈點之，與事之非者，則塗抹之。不論其文，而論其事。則春秋弑君三十六，亡國五十二，將盡取聖人之經而塗之抹之。今斯編評閱處，有圈點而無塗抹，一洗從前之陋。

一、敘事之中，夾帶詩詞，本是文章極好處，而俗本每至「後人有詩嘆曰」，便處處是周靜軒先生，而其詩又甚俚鄙可笑。今此編悉取唐宋名人作以實之，與俗本大不相同。

一、七言律詩起于唐人，若漢則未聞有七言律也。俗本往往捏造古人詩句，如鍾繇王朗頌銅雀臺、蔡瑁題館驛屋壁，皆僞作七言律體，殊爲識者所笑。今悉依古本削去，以存其真。

一、後人捏造之事，有俗本演義所無，而今日傳奇所有者，如關公斬貂蟬、張飛捉周瑜之類，此其誣也，則今人之所知

也。有古本『三國志』所無、而俗本演義所有者、如諸葛亮欲燒魏延於上方谷、諸葛瞻得鄧艾書而猶豫未決之類、此其誣也、則非今人之所知也。不知其誣、母乃冤古人太甚、今皆削去、使讀者不爲齊樂所誤。

8 『隋唐志傳』原本未見、以至其概要可識矣。

一三一八

寫印本大略はこの書に言及しない。鉛印本大略と史略各版とに異同はない。

『隋唐志傳』の原本は相變らず未發見だが、褚人穫の『隋唐演義』序に言う「林瀚纂輯」本は、前田尊經閣に所藏せられ、上海圖書館にもその覆刊本が藏せられるという。前田本は書名を『鐫揚升庵批評隋唐兩朝志傳』と言ひ、萬曆己未（四七）金閩龔紹山刊、凡十二卷一百二十二回で、「東京貫中羅本編輯、西蜀升庵楊慎批」と題する。楊慎・林瀚の兩序がある。最近上海古籍出版社の『古本小説集成』に影印本が入った。

『史略』は褚人穫の改訂本『隋唐演義』の刊行年を「康熙十四年（一六七五）」とする。褚人穫の序は「康熙乙亥」（三十四年、一六九五）」と言う。しかし『古本小説集成』の徐朔方の前言では四雪草堂刊本の百回の挿圖に「康熙甲子（二十三年、一六八四）仲春古吳趙澄華」という刻工の題字があるので、序の日附は後刷の時點での附加だろうとする。ただそうだとにしても、初刷の時間は康熙甲子以前には溯らない。他に康熙甲子（一六八四）以前の刊本の存在が證されない限り、『史略』が「康熙十四年（一六七五）」としたのは、「康熙乙亥（三十四年）」から「三」を落して、そのまま西曆に換算したとしか考えようがない。

なお褚人穫の『隋唐演義』以前に「新鐫徐文長先生批評隋唐演義」と稱する十卷一百一十四節の明刊本があるが、これは熊鍾谷『唐書志傳』とこの『隋唐兩朝志傳』を割裂綴合して成ったもので、褚本とは異なる。

褚人穫「隋唐演義序」云、昔人以通鑑爲古今大帳簿、斯固然矣。第既有總記之大帳簿、又當有雜記之小帳簿、此歷朝

傳志演義諸書所以不廢於世也。他不俱論，即如隋唐志傳，創自羅氏，纂輯於林氏，可謂善矣。然始於隋唐剪彩，則前多闕略，厥後鋪綴唐季一二事，又零星不聯屬，觀者猶有議焉。昔籀庵先生，曾示予所藏逸史，載隋煬帝朱貴兒唐明皇楊玉環再世因緣事，殊新異可喜，因與商酌，編入本傳，以爲一部之始終關目。合之遺文艷史，而始廣其事，極之窮幽仙證，而已竟其局。其間闕略者補之，零星者刪之，更采當時奇趣雅韻之事點染之，匯成一集，頗改舊觀。乃或者曰，再世因緣之說，似屬不根。予曰，事雖荒唐，然亦非無因，安知冥冥之中不亦有帳簿，登記此類以待銷算也。然則斯集也，殆亦古今大帳簿之外，小帳簿之中所不可少之一帙歟。時康熙乙亥冬十月既望，長洲褚人穫學稼氏題于四雪草堂。褚人穫「四雪草堂重編隋唐演義發凡」云，一、隋唐演義原本，出自宋羅貫中。明正德中，三山林太史亨大復加纂續授梓，行世已久。而坊人猶以爲未盡善。近見逸史，載隋帝唐宗與貴兒阿環兩世會合，其事甚新異，因爲編入。更取正史及野乘所紀隋唐間奇事快事雅趣事，彙纂成編，頗堪娛目。非欲求勝昔人，聊以補所未備云爾。

一、書名隋唐演義，似宜全載兩朝始末。但是編以兩帝兩妃再世會合事爲一部之關目，故止詳隋煬帝，而終於唐明皇。肅宗之後，尚有十四傳，其間新奇可喜之事，當另爲晚唐志傳以問世，此不贅及。（下略）四雪草堂主人謹識。

林瀚「隋唐演義原序」云，羅貫中所編三國志一書，行於世久矣。逸士無不觀之。而隋唐獨未有傳志，予每憾焉。前寓京師，訪有此書，求而閱之，知實亦羅氏原本。第其間尚多闕略。因於退食之暇，徧閱隋唐諸書所載英君名將忠臣義士，凡有關於風化者，悉爲編入，名曰隋唐志傳通俗演義。蓋欲與三國志並傳於世，使兩朝事實愚夫愚婦一覽可概見耳。予既不計年勞，抄錄成秩，又恐流傳久遠，未免有魯魚亥豕之訛，茲更加訂正，付之剞劂。庶幾觀者無憾。夫飽食終日，無所用心，不若博奕之猶賢乎已。若予之所好在文字，固非博奕技藝之比。後之君子能體予此意，以是編爲正史之補，勿第以稗官野乘目之，是蓋予之至願也夫。時正德戊辰仲春花朝後五日，賜進士出身資政大夫南京參贊機務兵部尚書致

仕前吏部尚書國子監祭酒左春坊左諭德兼經筵日講官同修國史三山林瀚撰。以上皆四雪草堂刊本所載。
『隋唐演義』計一百回、以至而精神反蕭索矣。

寫印本大略十二云、又有隋唐演義者、據褚人穫序所云貫中舊本。其書多取宋人所作海山迷樓開河三記及唐人雜說、間雜以無稽之談、與三國演義同。今褚本分爲二書、名上半部曰隋煬豔史。

最後の記述は誤りで、鉛印本大略で削除された。ただ上半部はそれだけで『大唐志傳』として單行されたことがあつて、孫楷第書目(二、明清講史部)は「大隋志傳四卷四十六回 存 坊刊本。清無名氏撰。題「竟陵鍾惺伯敬編次」、「溫陵李贄卓吾參訂」。卷首載林瀚序。實卽割裂褚人穫書前半部爲之、而改題名目。」と述べる。大塚目には數種が著録される。

鉛印本大略と初版の間に若干の異同があるのみで、初版と訂正版の間には異同はない。「凡隋唐間英雄」の「凡」を鉛印本大略では「其」に作り、「喜其新異・因以入書」を「以其新異可喜、因取入之」に作る。

『魯迅藏書目錄』平裝部分、五、文學 小説云、隋唐演義 十卷一百回 褚人穫著 無出版年月 上海 商務印書館。
近刊のテキストには、四雪草堂刊本の比較的早期の影印が『古本小説集成』に收められた。排印本には古典文學出版社本(一九五六)、上海古籍出版社本(一九八一)等があるが、いずれも序や批評を削っている。

「再世緣」之事 褚人穫の言う「袁于令所藏『逸史』」とは如何なる書か未詳。『古本小説集成』の前言を書いた徐朔方は「再世姻緣故事采自唐代盧肇的『逸史』」と述べるが、少なくとも現存する盧子「逸史」の佚文では未だ確認することができない。あるいは「唐宋遺史」か、それともまた全く別の書か未詳。

小説舊聞鈔『隋唐演義』項引『兩槩秋雨盦隨筆』七云、隋唐演義小説也、叙煬帝明皇宮闈事甚悉、而皆有所本。其

叙土木之功、御女之車、矮民王義及侯夫人自經詩詞、則見于迷樓記。其叙楊素密謀、西苑十六院名號、美人名姓、泛舟北海遇陳後主、楊梅玉李開花、及司馬戡逼帝、朱貴兒殉節等事、並見于海山記。其叙宮中閱廣陵圖、麻叔謀開河食小兒、冢中見宋襄公、狄去邪入地穴、皇甫君擊大鼠、殿脚女挽龍舟等事、並見于開河記。三記皆韓偓撰。其叙唐宮事。則雜採劉餗隋唐嘉話、曹鄴梅妃傳、鄭處誨明皇雜錄、柳琔常侍言旨、鄭榮開天傳信記、王仁裕開元天寶遺事、無名氏大唐傳載、李德裕次柳氏舊聞、史官樂史之太真外傳、陳鴻之長恨歌傳、復緯之以本紀・列傳而成者、可謂無一字無來歷矣。(魯迅)案、迷樓海山開河三記、皆不知何人作、明人始妄以韓偓當之。梅妃傳亦本無撰人名、題曹鄴者、乃顧氏文房小說本、唐人說蒼仍之。梁氏蓋甚爲此等坊本所誤。「大業拾遺記」はここに見えないから、魯迅の補筆であることが分る。

10 今舉一例、以至引文末尾。

一三十一〇

鉛印本大略から三八年版全集に至るまで誤字を除いて異同はない。五七年版全集で改訂が加えられた。舊版では「山侍坐于側」の「側」下にすべて「旁」字があり、「見他腹垂過膝」は「見他腹過於膝」に作り、「天氣向暖」は「天氣尚暖」に作る。「隋唐演義」の版本は「四雪草堂」本を掲げるものが多いが、二三の版本を見ただけでも文字文句の異同はかなりの量が確認される。五七年版全集の訂正も、確かに「旁」字のない版本もあるし、「天氣向暖」の「向」に創るテキストもあり、その方が理屈にも合うけれども、魯迅使用のテキストを特定した上で、よりよい版本によって引用全體にわたって改訂を施すのでなければ、魯迅がどんな版本を用いたかを知る手掛りを残すためにも、少なくとも訂正版のままにしておくべきである。大塚目によれば「隋唐演義」は相當數の版本が傳えられる。

11 「殘唐五代史演義」未見、以至湯顯祖批評。

この部分は訂正版での補筆である。

一三四十六

「關於小説目錄兩件」〔集外集拾遺補編〕全集八云、甲、內閣文庫圖書第二部漢書目錄 子 第十類、小説。……〔殘唐五代史演義傳〕（六十回、二卷。宋羅本。明湯顯祖批評。清版。四本。）

「改訂內閣文庫漢籍目錄」（昭和四六）では集部戲曲小説類に「鐫玉茗堂批點殘唐五代史演義傳 二卷六十回 題明羅本撰 湯顯祖評 清刊（三讓堂）」と著録、昌平饗の舊物である。その後の調査でいろんな版本が発見され、いまでは「李卓吾批點」と稱する八卷六十回の明刊本が最も早いものとされている。他に六卷、十二卷本等があるが、全六十回であることは變らない（孫目、大塚目参照）。近刊では李卓吾批評本を底本にし玉茗堂評點本を參校にしたという寶文堂書店（一九八三）排印本があるが、大陸排印本の通例として序文等を削除している。影印本では復旦大學圖書館藏明末刊本が「古小説集成」に收められた。

この書そのものについて孫楷第『日本東京所見中國小説書目』（一九五三・上雜出版社版六二頁）で、『隋唐兩朝志傳』との關係を指摘して次のように言う。「……又熊書（熊鍾谷『唐書志傳』）附詩、多云『周靜軒先生』。此本（『隋唐兩朝志傳』）則每回多附『麗泉』詩。『靜軒』之名亦間見於各回中。而其俚拙實亦相埒。靜軒麗泉、今俱不知爲何如人、殆與熊鍾谷輩爲一流人物。其十二卷後木記、云「書起隋公楊堅、至僖宗乾符五年而止。繼此者則有『殘唐五代志傳』、讀者不可不並爲涉獵。」今「殘唐五代傳」、每回亦多附麗泉詩、與此正同。顯係同時編次二書、而麗泉者亦參與其事之人。『殘唐五代』今署「中羅貫」、容係舊本、然附麗泉詩之『殘唐』、必與此附麗泉詩之萬曆己未刊本『隋唐兩朝志傳』時代相去不遠、則可斷言耳。」その木記を再録すれば次の如である。「是集自隋公楊堅于陳高宗大建十三年辛丑歲、受周主禪即位起、歷四世禪位于唐高祖、以迄僖宗乾符五年戊戌歲唐將曾元裕勦戮王仙芝止、凡二百九十五年。繼此以後、則有殘唐五代志傳詳而載焉。讀者不可不並爲涉獵、以瞻全書云。萬曆己未歲季秋既望金閩書林龔紹山繡梓。」

『北宋三遂平妖傳』原本亦不可見、以至故曰『三遂平妖傳』也。

寫印本大略はこれに言及しない。「原本亦不可見、較先之本爲四卷二十回、序云王愼修補」は訂正版での加筆、それ以前の版は鉛印本大略より「二十回」とするのみ。他に各版通じて異同はない。

『晁氏寶文堂書目』卷中 子雜云、三遂平妖傳上下卷。又云、三遂平妖傳南京刻。

「二十回」本、即ち王愼修校刻本は、いま馬廉舊藏の北京大學圖書館本と天理圖書館藏本の二部しか知られておらず、馬廉が自己の有に歸した際に自分の齋號を「平妖堂」と稱した程の書であるから、さらにある本ではない。魯迅がその梗概まで記しているからには、彼は鉛印本大略成稿までに馬廉舊藏の、その書を借覽したにちがいない。その間の經緯は未詳であるが、後に述べる錯誤に見られるように草率に通覽したものと思われる。この書は北京大學圖書館藏本が排印本（一九八三・北京大學出版社）となり、天理本は『天理圖書館善本叢書』（一九八一・八木書店）に影印され、さらにそれによつて『古本小說叢刊』（中華書局）に覆印された。この書の見返しには「馮夢龍先生增訂」と唱うが、諸家の説は一致して後附のものとする。なお書名に冠せられた「北宋」の二字はむしろ後の通行本のものであつて刪るべきである。

『宋史』卷二九二 明鎬傳云、……王則叛、命鎬爲體量安撫使、則未下、又命參知政事文彥博爲宣撫使、以鎬副之。

貝州平、遷端明殿學士、給事中、權三司使、諸將悉超遷、都虞候、士卒八千四百人、第其功爲五等、每等遷一資。彥博數推鎬功、拜參知政事。（中略）

王則者、本涿州人。歲饑、流至恩州、自賣爲人牧羊、後隸宣毅軍爲小校。恩、冀俗妖幻、相與習五龍・滴淚等經及圖讖諸書、言釋迦佛衰謝、彌勒佛當持世。初、則去涿、母與之決別、刺「福」字於其背以爲記。妖人因妄傳字隱起、

爭信事之、而州吏張巒·卜吉主其謀、黨連德·齊諸州、約以慶曆八年正旦、斷澶州浮梁、亂河北。會其黨潘方淨以書謁北京留守竇昌朝、事覺被執、故不待期、亟以七年冬至叛。

時知州張得一方與官謁天慶觀、則率其徒劫庫兵、得一走保驍捷營。賊焚門、執得一囚之。兵馬都監·內殿承制田斌以從卒巷鬪、不勝而出。城扉闔、提點刑獄田京·任黃裳持印、棄其家縋城出、保南關。賊從通判董元亨取軍資庫鑰、元亨拒之、殺元亨。又出獄囚、囚有愆司理參軍王獎者、遂殺獎。既而節度判官李浩·清河令齊開·主簿王溪皆被害。

則僭號東平郡王、以張巒爲宰相、卜吉爲樞密使、建國曰安陽。榜所居門曰中京、居室廐庫皆立名號、改年曰得聖、以十二月爲正月。百姓年十二以上、七十以下、皆涅其面曰「義軍破趙得勝」。旗幟號令、率以「佛」爲稱。城以一樓爲一州、書州名、補其徒爲知州、每面置一總管。然縋城下者日衆。於是令守者伍伍爲保、一人縋、餘悉斬。

有州民汪文慶·郭斌·趙宗本·汪順者、自城上繫書射鎬帳、約爲內應、夜垂縋以引官軍。既內數百人、焚樓櫓、賊覺、率衆拒戰。初、官軍既登、欲專其功、斷縋以絕後來者。及與賊戰、兵寡不敵、與文慶等復縋而下。是夜、城幾克。則期正月十四日出要劫契丹使、諜者以告。鎬遣殿侍安素伏兵西門、賊果以數百人夜出、伏發、皆就獲。

城峻不可攻、乃爲距闔、將成、爲賊所焚。遂卽南城爲地道、日攻其北牽制之。及文彥博至、穴通城中、選壯士中夜由地道入、衆登城。賊縱火牛、官軍以槍中牛鼻、牛還攻之、賊大潰、開東門遁。閣門祇候張綱緣壕與戰、死之。總管王信捕得則、其餘衆保村舍、皆焚死。檻送則京師、支解以徇。則叛凡六十六日。」

童昌祚「王愼修校刻本三遂平妖傳序」云、夫技至神異、無逾劍術矣。紅線磨勒諸人、種種誕怪、不誠善幻哉。未有據城叛邑、抗拒王師、逞螳臂以當萬乘者。平妖一傳、其書不類諸經、卽人世萬萬無有。宋史偏釋、王則僭號東平、稱引彌勒釋迦、簧鼓日甚、尋爲潞公所執。則編中數千百言、語語如真、無乃好爲駭俗、徒令田峻野叟資論咄耶。愼修王君

奈何撥捨唾餘、更爲木災而分貫中氏謗也。雖然慎修固搦管工文詞、夙抱請纓投筆之志。日者西北一一首難、我師先發、纍纍就俘、迺日本狡焉起疆、尚稽蕩掃、天下沸于軍輿。彼深山大澤、窟數遁逃、若史遷所記亡命作奸之徒、靡聞理道、諳運命、寧無妄意占驗、煽誘黔愚、謂五龍滴淚之妖、或可載試、而若勝國之白蓮、東京之風角、羸秦之狐鳴蛇泣、魚帛牛書也者、將令觸目涉耳、悚念警心、躍然其技術之奇、可以快逐一時、而憮然其駢首斧斤、竄身鼎鑊、不逾年而暴于朝陽、震于轟霆、無剩質也。邪之與正、數既不勝、睹形畏影、人所常情。儻潛挫于此刻乎、即跳于史書、詡于劍術、冒譎誕而蒙浮游、慎修固甘之也。自非然者、語怪搜神、大道所忌。傳復去越六經遠甚、奚足潤塵工左、價高洛陽。慎修顧卓揚羅氏之波而涉其末流也哉。噫嘻、世以是梓異慎修、以斯言迂不佞乎。武勝童昌祚益開甫撰。虎林柴應楠仲美甫書。

二十回本の梗概を述べる部分に「其時張鸞卜吉彈子和尚見則無道、皆先去」とあるが、これは四十回本との混同で、二十回本では最後まで誰も去らない。したがってまた「幸得彈子和尚化身諸葛遂智助文」という事柄もありえない。これは次節に見える杜七聖の法術の話と共に、稀觀本の草率な借覽による魯迅の思い違いであろう。

13 「平妖傳」今通行本十八卷四十回、以至引文末尾。

三四一四

寫印本大略はこの書に言及しない。鉛印本大略は「史略」に略同、但し「平妖傳」今通行本十八卷四十回」を「今本四十回」に作る。また同じ部分、初版より第七版まで「通行」の二字を欠く。引用文中では「向、着葫蘆兒」の「向」字は鉛印本大略から三八年版全集まで通じて「看」に作るが、五七年版全集で現行の如くに改められた。また「我從來行這家法術」の「術」字も五七年版全集で始めて附加された。魯迅が據ったであろう版本はその「藏書目錄」に著録する十八卷本だと思われるが、五七年版の改訂がそれに據るものかどうか未詳。「史略」引用の如く作る版本があ

る以上、全面に渉る改訂ならともかく、部分的には改めるべきでない。元に戻すべきである。また「收了我孩兒的魂魄」の「孩」字は訂正版で脱落し、五七年版で又補われた。

「宋民間之所謂小説及其後來」『墳』全集二云、松禪老人序「今古奇觀」云、「墨憨齋增補『平妖』、窮工極變、不失本來。……至所纂『喻世』『醒世』『警世』三言、極摹人情世態之岐、備寫悲歡離合之致。……」是纂三言與補『平妖』者爲一人。明本『三遂平妖傳』有張無咎序、云「茲刻回数倍前、蓋吾友龍子猶所補也。」而首葉題「馮猶龍先生增定。」可知三言亦馮猶龍作、而龍子猶乃其游戲筆墨時的隱名。

張無咎「重刻平妖傳序」云、小説家以眞爲正、以幻爲奇。然語有之、畫鬼易、畫人難。西游幻極矣、所以不逮水滸者、人鬼之分也。鬼而不人、第可資齒牙、不可動肝肺。三國志人矣、描寫亦工、所不足者幻耳。然勢不得幻、非才不能幻、其季孟之間乎。嘗辟諸傳奇、水滸西廂也、三國志琵琶記也、西游則近日牡丹亭之類矣。他如玉嬌麗金瓶梅、另辟幽陰、曲中雅奏。然一方之言、一家之政、可謂奇書、無當巨覽、其水滸之亞乎。他如七國兩漢兩唐宋、如弋陽劣戲、一味鑼鼓了事、效三國志而卑者也。西洋記如王巷金家神說謊乞布施、效西游而愚者也。至于續三國志封神演義等、如病人嚙語、一味胡談。浪史野史如老淫土娼、見之欲嘔、又出諸雜刻之下矣。王緜山先生每稱羅貫中三遂平妖傳堪與水滸頡頏、余昔見武林舊刻本止二十回、開卷卽胡員外逢晝、突如其來、聖姑姑不知何物、而張鸞彈子和尚胡永兒及任吳張等、後來全無施設、方諸水滸、未免強弩之末。茲刻回数倍前、蓋吾支龍子猶所補也。始終結構、有原有委、備人鬼之態、兼眞幻之長。余尤愛其以僞天書之誣、兆眞天書之亂、妖絲人興、此等語大有關係。卽質諸羅公、亦云青出于藍矣。使緜山獲睹之、其嘆賞又當何如邪。書已傳于泰昌改元之年、子猶宦游、板毀于火、余重訂舊叙而刻之。子猶著作滿人間、小説其一斑、而茲刻又特其小説中之一斑云。 楚黃張無咎述。

「魯迅藏書目錄」子部小說家類云、平妖傳 十八卷四十回 元羅貫中著 明馮夢龍增訂 清刻本 六册

重刊平妖傳引 明童（昌）祚著 鈔本 據明汪慎修刊本平妖傳鈔附三遂平妖傳目錄 四頁

「杜七聖法術」これは「史略」の行文から、馮夢龍增訂五回の一つで、舊本（王慎修本）の各回に入された、「怪民道術」の一だと讀めそうであるが、この故事は王慎修本の第十一回に見えるものであり、數字に異同のあるほかは全く同じである。前節12での混同と同じく魯迅の思い違いであろう。

¹⁴ 此蓋相傳舊話、以至宋鄭獬有「馬遂傳」。

一三六六

鉛印本大略および初版には尉遲偓の記述なく、合訂二版で附加された。即ち「此蓋相傳舊話……明嘉靖隆慶間事」を「此乃明嘉靖隆慶間事、見『五雜俎』六」に作る。また「則當時」を「亦」一字に作る。他に異同なし。

尉遲偓『中朝故事』卷下云、咸通中、有幻術者、不知其姓名。於坊曲爲戲、挈一小兒年十歲已來、有刀截下頭、臥於地上、以頭安置之、遂乞錢云、活此兒子。衆競與之、乃叱一聲、其兒便走起。明日又如此。聚人千萬、錢多。後叱兒不起。其人乃謝諸看人云、某乍到京國、未獲參拜所有高手、在此致此小術、不行且望縱之、某當拜爲師父。言訖、叱其小兒、不起。俄有巡吏執之、言、汝殺人、須赴公府。其人曰、千萬人中、某固難逃竄、然某更有異術、請且觀之、就法亦不晚。乃於一函內、取一爪子、以刀劃開臂上、搯爪子於其中、又設法起其兒子、無效。斯須露其臂、已生一小甜爪子在臂上。乃曰、某不欲殺人、願高手放斯小兒起、實爲幸矣。復叱之、不興。其人嗟嘆曰、不免殺人也。以刀削其甜爪落、喝一聲、小兒乃起如故。衆中有一僧、頭歛然墮地、乃收拾戲具、并小兒入布囊中、結於背上。仰面吐氣、一道如疋練、上衝空中。忽引手攀緣而上、丈餘而沒、遂失所在。其僧竟身首異處焉。庫本。

小説舊聞鈔『平妖傳』項引『古夫亭雜錄』三云、元至正間、有范益者、京師名醫也。一日有嫗携二女求診。曰、此非

人脈、必異類也。當實告我。媼泣拜曰、我西山老狐也。與之藥而去。今小說平妖傳實借用其事。而所謂嚴三點、則南昌神醫也、予已別記于居易錄。又傳中杜七聖與蠻子和尚鬪法斬葫蘆事、見五雜組、乃明嘉隆間事、非杜撰也。

「五雜組」六云、夷堅志載法術、若毛一公汲井婦人之類、一遇其敵、便幾至殺身。相傳嘉隆間、有幻戲者、將小兒斷頭、作法訖、呼之即起。有游僧過、見而哂之。俄而兒呼不起、如是再三。其人即四方禮拜、懇求高手、放兒重生、便當踵門求救。數四不應、兒已僵矣。其人乃撮土爲坎、種葫蘆子其中。少頃、生蔓結小葫蘆。又仍前禮拜哀鳴、終不應。其人長吁曰、不免動手也。將刀砍下葫蘆。衆中有僧、頭欵然落地、其小兒應時起如常。其人即吹煙一道、冉冉乘之以升、良久遂沒、而僧竟不復活矣。蓋術未精而輕挑豐端、未有不死者也。夷獠之中、此術最多。庚巳編載吳中焚屍、亦有此術。有李智者、甚與毛一公相類也。中華書局「中國文學參考資料叢書」本（一九五九）。

小說舊聞鈔「平妖傳」項引「居易錄」二五云、今小說演義記貝州王則事、其中人亦多有依據、如馬遂擊賊被殺是也。其云成都神醫嚴三點者、江西人、能以三指間知六脈之受病、以是得名、見癸辛雜識。

小說舊聞鈔「平妖傳」項引「香祖筆記」一〇云、小說演義亦各有所據、如水滸傳平妖傳之類、予嘗詳之居易錄中。（中略）平妖傳多目神、借用呂文靖事。指使馬遂、乃北寺留守賈魏公所遣、借作潞公耳。鄭毅夫有馬遂傳。嚴三點已詳予居易錄。

王闢之「澠水燕談錄」卷四云、慶歷末、妖賊王則盜據貝州。賈魏公鎮北門、倉卒遣將、引兵環城、未有破賊之計、公日夜憂思。有指使馬遂者白曰、「堅城深池、不可力取、願得公一言、入城殺元凶、餘黨可說而下也。」公壯其言、遣行、丁寧祝之曰、「壯士立功、在此行也。」遂至城下、浮渡濠、叫呼、守城者垂匹練、縋身以上。見賊隅坐、爲陳朝廷恩信、「爾能束身出城、公爲爾請于朝、亦不失富貴。若守迷自固、天子遣一將提兵數千、不日城下、血膏戰地、肉飽

犬彘、悔無及矣。」辭尤激切、賊不答。遂度終不能聽、遂急擊、賊仆地、扼其喉幾死。左右兵至、遂被殺、聞者莫不義之。是時、翰林鄭毅夫方客魏、爲之作傳。中華書局「唐宋史料筆記叢刊」本。

鄭毅夫の「馬遂傳」への言及は太田辰夫氏「平妖傳解説」（平凡社「中國古典文學大系」）に於ける指摘によるもので、王士禛の『香祖筆記』の記述も『灑水燕談錄』に據るものであつて、實際に「馬遂傳」を見てのものではない可能性が強い。

（一九九九・九・二五）

趙景深「中國小説史略傍證」は『宋史』四四六の「馬遂傳」に言及する。三百字程の短い傳であるが、あるいは鄭毅夫の「傳」を承けるものがあるかもしれない。（二〇〇〇・一・一九再校時補記）